

—114号目次—

● 第14期会長就任ご挨拶	1
● 第39回学術大会を終えて	2
● 第39回学術大会 参加者からの声	3
● 第40回日本保健医療行動科学会学術大会のご案内（第1報）	5
● 【本の紹介】『死の定義と＜有機的統合性＞ IntegrityとIntegrationの歴史的変遷』	6
● 2025年度総会報告	7
● 第14期役員・委員会構成	8
● 支部活動報告・お知らせ	9

第14期会長就任ご挨拶

諏訪 茂樹
(東京女子医科大学)



本年6月21日の2025年度総会において、第13期(2022年6月～2025年5月)に引き続き、第14期(2025年6月～2028年5月)も会長の役割をお引き受けすることとなりました。私にとりましては過分な役割であります。患者中心の安心・安全な質の高い医療を実現するために、これからも皆様とともに行動科学ができることを話し合い、活動して参りたいと考えます。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により1年遅れることになりましたが、いよいよ2024年より米国で医師資格を取得するためには、米国以外の医科大学卒業生も、行動科学を学んでいることが条件となりました。これに伴い日本の医学教育でも行動科学の履修が実質的に必修となり、本学会の存在意義はこれまで以上に高まったと言えます。

米国の医師国家試験において行動科学が出題されるようになったのは、実に半世紀も前の1972年からであり、それは心疾患、悪性新生物、脳血管疾患など、いわゆる生活習慣病が古くから米国で死因の上位を占めていたためです。人々に生活習慣を改善してもらうためには、従来の生物科学に基づく医学だけでは限界があり、そこで人文社会科学の知識と技術も活用して行こうということになったのです。

米国の医師国家試験委員会が示した行動科学の科目概要は、生物学の他、心理学、社会心理学、社会学などで扱われる学習テーマで構成されていました。人間を身体として捉えるだけでなく、自分で感じたり考えたりする主体としての意識を持ち、しかも他者と相互に影響を及ぼしながら社会の中で暮らす存在として捉え、働きかけていくことの必要性が、半世紀も前から示されていたこととなります。

本会は保健医療にかかわる理系と文系の多様な分野の教育研究職や実践家などから成り立っており、多様性こそが本会の特徴と言えます。専門とする学問分野、職種、所属する集団内での地位などにかかわらず、会員間で対等な関係を築いて相互作用をするとき、本会の多様性は新たな価値を生み出すことになるでしょう。学術大会の開催や雑誌の発行だけでなく、相互作用のための様々な企画をこれからも試みて参ります。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

第39回日本保健医療行動科学会学術大会を終えて

第39回大会長 深井 稯博

第39回日本保健医療行動科学会学術大会が、2025年6月21日（土）、22日（日）の両日、明海大学浦安キャンパスで開催されました。多くの参加者と共に、2日間の議論を行うことができました。一般市民の皆さま、発表や座長等で登壇いただいた皆様、運営に携わっていただいた諏訪茂樹会長、樋口倫子副会長をはじめとする運営チームの皆様、心より感謝申し上げます。

2025年は、日本で全ての団塊の世代の人たちが75歳以上という後期高齢者になる年です。わが国で、そしてグローバルに進んでいく人口の高齢化の中で、保健医療行動科学の専門家の立場で、

高齢者とそれを支える人たちの支援という観点から、「人生100年時代の保健医療行動科学」を大会テーマといたしました。本学会は、人間の健康にかかわる行動（個人・集団・社会）の変容過程を実証的、体系論的に解明しようとする健康行動科学に関する研究・教育の発展のために、社会・人文科学、自然科学の各分野の国内・外研究や学習の場づくりを目的とし、中川米造氏（初代会長）らの呼びかけで1986年に発足した学術団体です。そこで、保健医療行動科学の専門家で構成される学会として、一人一人の専門職として、高齢者の健康をどう支援するのかを考えるというのが趣旨でした。

ニーズの点からみると、学会発足当時と比較して、日本の人口構造は大きく変化してきています。2024年10月1日現在の総人口1億2,380万人のうち65歳以上人口は3,624万人（男性1,572万人、女性2,053万人）であり、総人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）は29.3%に達し、75歳以上人口（後期高齢者）は2,078万人（男性830万人、女性1,247万人）となり、65歳～74歳人口を上回っています。総人口に占める割合は16.8%となっています。これらの高齢者の生活環境も大きく変化してきています。65歳～69歳の就業率は53.6%であり、70～74歳でも35%が就業されています（内閣府令和7年版高齢社会白書）。その一方、2024年の世帯構造をみると65歳以上の者のいる世帯は、単独世帯が32.7%、夫婦のみの世帯が31.8%となっています（厚生労働省2024年国民生活基礎調査）。高齢者の特性は、機能的能力、内在的能力の加齢による低下は避けられず、多病をかかえる傾向があること、暦年齢だけでは図れない多様性があることにあります（WHO, 2015, World Report on Ageing and Health）。

このような中で、本大会のプログラムでは、共有意思決定（SDM）の歴史と最新情報について中山健夫先生（京都大学）に特別講演をお願いしました。また初日の体験学習ワークショップでは、多職種連携等を意識した企画をしてくださり、2日目のシンポジウムⅡでは「人生100年時代の保健医療行動科学」をテーマに高齢者の生活と行動変容を含んだ議論が展開されました。また、特に「高齢者と健康」を考える場合に、多分野連携は不可欠の要素となるので、行動変容に関わる2学会と本学会からの3人のシンポジスト（日本健康教育学会理事長武見ゆかり先生、日本行動医学会前理事長井上茂先生、本学会長諏訪茂樹先生）にそれぞれの学会の特性と今後の連携について議論していただきました。

本大会に参加してくださった皆様に改めて感謝申し上げます。



第39回学術大会 参加者からの声（大会後アンケートより）

参加申込者に「ご自身がお参加された各企画等に関するご感想やアドバイスを、6月28日までに匿名でお聞かせ下さい。」と、6月23日にメールにてお願いしたところ、参加者7名からGoogleフォームに次のようなご回答をいただきました。ご回答いただきまして、誠にありがとうございました。（運営チーム 諏訪茂樹）

<基調講演 「健康長寿と歯科医療・口腔保健」>

- ・疫学データをいろいろご紹介いただき、勉強になりました。
- ・多少の知識はあっても深くは知らなかったので、ためになりました。
- ・大変意義深いご講演ありがとうございました。準備のため最後の部分が拝聴できず残念でした。アーカイブ動画などがあればなと思っております。

<体験学習ワークショップ 1)「『患者として感じる』－医療・歯科医療コミュニケーションワークショップ－>

- ・参加者の方々がなごやかに話されるので気持ちが和みました。

<体験学習ワークショップ 2)「多職種連携で創る人生100年時代」について>

- ・企画者として参加。市民の方の声が聞けて、看護職が取り組むべきことが改めてわかりました。看護師は傾聴という免罪符を得て満足してはいけないことが良くわかりました。少数精鋭の良い企画だったと思います。

<体験学習ワークショップ 3)「こどもとかぞくのヘルスエスノグラフィ」>

- ・エスノグラフィの大きな観点の捉え直しができ、深い学びにつながりました。また、日ごろを感じているところを改めて再確認することもできましたので、参加をさせていただき、とても価値ある時間になりました

<懇親会>

- ・大変楽しく過ごさせていただきました。JAHBSは、いろいろな職種の方が参加していらっしゃるの、視野が広がります！

<一般演題口頭発表 グループ1（対話）>

- ・時間が余ることなく、充実した討論ができてよかったです。
- ・これからの対人援助職のあり方について、新しい知見、考え方を取り入れる価値ある内容であったと思います。
- ・全体的に参加者が少なく、一般演題については1会場の実施にした方がいいと思います。

<一般演題口頭発表 グループ2（医療）>

- ・普段考えているところから、新たに考えを展開することができました。対人援助における改めてその原点を考えることができました。
- ・難病についての発表は自身に照らし合わせてもたいへん興味深く拝聴致しました。

<一般演題ポスター発表>

- ・今まで掲示だけでしたが、流れでプレゼンを行うことになりました。しかし、かえってプレゼンを行った方が、人が集まってくださってよいと思いました。
- ・人と人との関わりを対話を通じて展開していくことについてとても意義あるものでありました。

★続きは次ページをご覧ください★

<特別講演：共有意思決定>

- ・エビデンスの考え方について、とても勉強になりました。共有することの意味を改めて考えました。
- ・中山先生のご講演の座長をさせていただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・大変興味深いテーマで勉強になりました。
- ・これからの医療のあり方とともに、患者としての意識、そして、研究としてのあり方について再認識できました。

<シンポジウムⅠ「知のシェアリング：健康関連学会のつながりと役割」>

- ・途中までの参加でしたが、他学会の取り組みが聞けて良かったです。
- ・関連学会との交流実績などを話してくださると興味深い。

<シンポジウムⅡ「人生100年時代の保健医療行動科学」>

- ・シンポジストとして初めての経験でしたが、楽しかったです。他の先生方のお話がとても興味深かったです。

<大会運営全般について>

- ・スタッフのみなんで力を合わせました。
- ・とても良かったです。ご準備大変だったことと思います。ありがとうございました。
- ・小人数でたいへんそうでしたが、まあまあよかったです。
- ・丁寧なご対応いただきまして感謝申し上げます
- ・参加者の方々をさらに募れるように、広報部のみの告知ではなく、会員全体で盛り上げる方策が必要かと思いました。
- ・一般演題の口頭発表の質疑応答時間について、学会開催の1週間前に通知された。質疑応答時間が25分というのは長く、それに対する準備を直前にしなければならなかった。今後は早めに連絡していただくとありがたいです。また、2日間すべての様子は存じ上げませんが、全体的に参加者が少ないことが残念でした。会場、時期、参加費用などを検討する必要があると思います。さらに、会場を案内するポスターは建物付近にしかないため、分かりにくかったです。もっと、市民が参加しやすいように宣伝するなどの対策が必要と思います。学会の理念には賛同するのですが、学術大会の在り方を検討していただきたいと思います。

<次年度以降の学術大会のテーマ等>

- ・8.にも記載しましたが、ポスター発表もプレゼンを入れてはいかがでしょうか？座長を指名すれば、参加者も1～2名ですが増えますし、掲示だけだとポスター会場に人が集まりにくいと思います。ご検討宜しくお願い致します。
- ・一般演題の一部は、内容的には関心を持つものではありませんでしたが、医療行動科学との関連性は非常に低いものと言わざるをえませんでした。学会として、全体的にももっと医療行動科学に特化するような演題にフォーカスすべきではないでしょうか。ぜひ、前向きにご検討をよろしく申し上げます。

e メールアドレス登録の【重要なお願い】

会員管理システムの導入に伴い e メールアドレスの登録が必須となりました。e メールアドレスが未登録の方は、すみやかに学会事務局 (info@jahbs.info) までお知らせください。すでに e メールアドレスをご登録いただいている場合の変更は、会員管理システムからご自身で可能です。

第40回日本保健医療行動科学会学術大会のご案内（第1報）

- テーマ 行動科学の『知』を結ぶ—
—医療人類学、エスノグラフィ、パフォーマンス(仮)
- 会期 2026年6月20日(土)・21日(日)
- 会場 AOSSA(アオッサ):福井駅より徒歩1分
- 大会長 道信 良子(福井県立大学)
- 主催 日本保健医療行動科学会

この度、第40回日本保健医療行動科学会学術大会を2026年6月20日・21日に福井県福井市において開催することになりました。大会のテーマは、「行動科学の『知』を結ぶ—医療人類学、エスノグラフィ、パフォーマンス」(仮)です。

本大会では、保健医療行動科学のさまざまな分野で得られた理論や方法論、そして具体的な実践をもとに、「病いや障がいを生きること」、「医療と癒し」そして「人を包むまち」などについて、エスノグラフィやパフォーマンス(創造的な実践)も取り入れながら考えていきます。

皆様のご参加をお待ちしております。

大会長 道信 良子

「中川記念奨励賞」候補者ならびに「奨励研究員」の募集

【日本保健医療行動科学会中川記念奨励賞】

中川記念奨励賞の候補者を募集いたします。受賞年度において45歳未満もしくは学会入会后10年未満の通常会員で、保健医療行動科学に関する学術的研究あるいは教育を含む諸活動において、顕著な業績を上げている方が受賞の対象になります。自薦・他薦いずれでも結構ですので、奮って応募してください。応募者は、本学会 Web サイトに掲載されている最新の「中川記念奨励賞内規(2023.6.17.最終改定版)」及び「中川記念奨励賞候補者の業績についての選考内規(2023.6.17.最終改定版)」を参照の上、履歴書及び研究業績リストを学会事務局に送付してください。

【日本保健医療行動科学会奨励研究員】

本学会では奨励研究員の制度を設けています。これは正会員で、関連分野での研究活動を行いながらも常勤の所属に恵まれない方々のために、少しでも社会的不利益を補完・救済することを目的とした制度です。この身分を希望される方は、希望の理由と履歴書及び研究業績リストを学会事務局に送付してください。奨励研究員の呼称を認められた方は「日本保健医療行動科学会奨励研究員」の身分を用いて論文の執筆や学会発表ができます。対象者の年齢制限はなく、任期は1年間とし、状況に応じて更新が可能です。審査・登録にかかる費用は無料です。応募期限は特にありません。

事務局便り

- 2025年度会費(2025年4月1日～2026年3月31日)及びそれ以前の会費が未納の方は、早急に「会員管理システム」よりお支払いの手続きをお願いいたします。会費納入に関してご不明な点やご相談などがございましたら事務局にご連絡ください(会員管理システム導入に伴い、会費の納入はオンラインでの銀行振込(りそな銀行宛)またはクレジットカード決済(各種)となります)。詳しくは本学会 Web サイトをご参照ください。
- 2013年6月(第10期)以降の理事会議事録及びニュースレター(第81号～第99号)を学会 Web サイトの会員専用ページに掲載しています。会員専用ページへのリンクは会員マイページトップにあります。ニュースレター第100号以降は学会 Web サイトで一般公開しています。
- 退会をご希望の場合は、本学会 Web サイトから退会届の様式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、PDF ファイルを e メールに添付して事務局に送付してください。

(事務局連絡先: info@jahbs.info)

本の
紹介

『死の定義と〈有機的統合性〉 IntegrityとIntegrationの歴史的変遷』

小宮山 陽子 著 勁草書房 2022年11月

紹介者 諏訪茂樹(東京女子医科大学)

本会の初代会長を務めた中川米造先生は、生命倫理についても強い関心を寄せられていた。「火葬して灰にならなければ生物科学的にも死とは言えないはず」とおっしゃっていたことを、私(諏訪)は鮮明に覚えている。

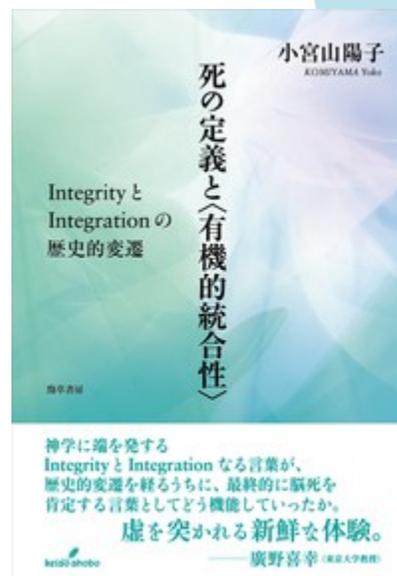
この度、2024年3月まで職場の同僚であった基礎看護学の小宮山陽子先生から、ご著書『死の定義と〈有機的統合性〉 IntegrityとIntegrationの歴史的変遷』(勁草書房 2022年)をプレゼントしていただいた。ご自身の博士論文に基づいて執筆されたものであり、それによると、諸部分の相互

作用により生まれる integrity を、一部分にすぎない脳の機能とすることにより、脳死が生まれたとのこと。とても説得力があり、医療分野での他の幾つかの問題についても、同様の説明ができるのではないかと、私の「妄想」は膨らんだ。

たとえば、チーム医療も本来は、各職種(医師、看護師、薬剤師、他)の相互作用によって生まれ、維持されるはずである。ところが、日本では「お医者様」文化が根深く、厚生労働省のチーム医療推進会議も「チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集」(2011年)において「医師、歯科医師はチームリーダー」とし、医師-非医師(コメディカル)の上下関係からなる日本独自のチーム医療もめずらしくないのである。

また、たとえば病院のガバナンスも本来は、医療スタッフだけではなく、他の病院職員、患者・家族などによる対話を通して成立するはずである。しかし、2017年の医療法改定により特定機能病院の病院長に権限が集中し、病院機能評価の評価項目でも2023年の改定(ver.3)で削除されるまでは「管理者・幹部のリーダーシップ」が求められていたのである。

脳死問題に限らず、医療の本来あるべき姿を考えるうえで、とても大切な基本概念を本書は提起している。ご一読をおすすめしたい。



日本保健医療行動科学会雑誌「投稿論文」随時受付中

- 学会雑誌に掲載する投稿論文は随時受け付けています。
- 雑誌の発行は年2回(6月及び12月の予定)です。
- 投稿原稿の種類は、原著論文、総説、研究ノート、資料、実践・活動報告です。
- 投稿論文は「オンライン投稿・査読システム(Editorial Manager®)」にて受け付けとなります。
- 投稿手順等の詳細は本学会 Web サイト(<https://www.jahbs.info/>)の「雑誌投稿について」のページに掲載しています。

2025年度総会報告

会員マイページにて事前にお知らせした議案書(総会資料)に基づき、2025年度総会が次の通り開催されましたので、ご報告いたします。

日時:2025年6月21日(土) 13:00-13:50

会場:明海大学浦安キャンパス講義棟2F 2206

参加者:学会員

1. 開会宣言(第13期会長 諏訪茂樹)
2. 第39回学術大会長の挨拶(深井稔博 深井保健科学研究所)
3. 議長・書記の選出 議長:村上真 書記:二瓶映美

<審議事項>

4. 《第1号議案》第14期会長・副会長承認 (総会資料1)
次の通り、異議なく承認となる。
会長:諏訪茂樹、副会長:岡美智代、樋口倫子
5. 《第2号議案》2024年度事業報告 (総会資料2)
「第14期理事・監事選挙の実施」と「雑誌第40巻特別号 第39回学術大会プログラム・抄録集の発行の準備」を加えること、また、「第13期第16回(2025年5月18日)(オンライン会議)」は2025年度事業とすることとし、承認となる。
6. 《第3号議案》2024年度収支決算報告 (総会資料3)
報告の通り、異議なく承認となる。
7. 監査報告
決算報告の通り納入・支出がなされ、証拠書類の保存、整理及び帳簿への記帳は良好であったことが報告される。
8. 《第4号議案》2025年度事業計画 (総会資料4)
「雑誌 第40巻特別号 第39回学術大会プログラム・抄録集の発行」と「雑誌 第41巻特別号 第40回学術大会プログラム・抄録集の発行準備」を加えることと、また「第14期第5回理事会(2026年5月)(オンライン会議)(予定)」は2026年度事業とすることとし、承認となる。
9. 《第5号議案》2025年度予算案 (総会資料5)
予算案通り承認となる。
10. 新顧問に末松弘行先生が加わることについて提案され、承認となる。

<報告事項>

11. 第14期役員・委員会構成について(総会資料6)
 - 1)2025年6月21日現在の顧問(7名)、理事(19名※会長任命理事も含む)、監事(2名)、評議員(20名)について、また各委員会の委員構成について報告された。
 - 2)理事会での審議により、今後、評議員が増える可能性があることも報告された。
 - 3)評議員の委員会委員就任に関しては本人承諾のうえで最終決定される。
12. 議長団の解散
13. 支部活動報告・収支決算報告
 - 1)東京支部
ヘルス・エスノグラフィ(2024年9月)とコーチングと動機付け面接(2025年2月)をテーマに、2回の研修会を実施した旨、報告あり。
 - 2)北海道支部 休止中 3)近畿支部 休止中
14. 第40回学術大会長の挨拶(道信良子 福井県立大学)
道信良子大会長からご挨拶いただいた。
15. 2025年度中川記念奨励賞・奨励研究員報告
いずれも2025年度の応募はなく、引き続き2026年度募集中であることが報告される。
16. 閉会の挨拶(第14期会長 諏訪茂樹)

第14期役員・委員会構成

▼役員構成

第14期役員＜任期2025年6月1日～2028年5月31日＞

〈顧問〉

末松弘行(医学)、仲尾唯治(社会学)、藤崎和彦(医学)、南 裕子(看護学)、宗像恒次(健康科学)

Brian Hurwitz(ブライアン・ハーウィッツ)(医学、英国)、John Launer(ジョン・ローナー)(医学、英国)

〈会長〉

諏訪茂樹(社会学)

〈副会長〉

岡 美智代(看護学)、樋口倫子(心理・福祉学)

〈理事〉

梓川 一(心理・福祉学)、岡 美智代(看護学)、上山千恵子(看護学)、
河口てる子(看護学)、小林好信(健康科学)、酒井幸子(社会学)、白土菜津実(看護学)、
諏訪茂樹(社会学)、中川 晶(医学)、任 和子(看護学)、花家 薫(健康科学)、
蓮井貴子(看護学)、樋口倫子(心理・福祉学)、深井稜博(歯学)、道信良子(社会学)、
村上 真(健康科学)、元村直靖(医学)、安酸史子(看護学)、吉岡隆之(健康科学)

〈監事〉

天野雅夫(社会学)、宮本眞巳(看護学)

〈評議員〉

上杉裕子(看護学)、大芦 治(心理・福祉学)、村岡 潔(社会学)、岡本響子(看護学)、
川村千恵子(看護学)、小坂素子(看護学)、紺井拡隆(歯学)、佐藤富美子(看護学)、
瀬在 泉(看護学)、徐 淑子(社会学)、平 英美(社会学)、鷹田佳典(社会学)、
高橋さつき(看護学)、二瓶映美(看護学)、林 哲也(心理・福祉学)、
藤田裕一(心理・福祉学)、本庄恵子(看護学)、馬込武志(心理・福祉学)、
松田 聡(医学)、山口 豊(心理・福祉学)、山崎裕美子(看護学)、渡辺理和(社会学)

＜以上、顧問7名、理事19名(会長・副会長を含む)、監事2名、評議員22名＞

▼委員会構成(案)

第14期役員＜任期2025年6月1日～2028年5月31日＞

【編集委員会(常設)】

樋口倫子(編集委員長・査読主担当)、上山千恵子(校閲・J-Stage主担当)、
小坂素子(校閲・J-Stage副担当)、吉岡隆之(規程等担当)、他、道信良子、梓川 一、
岡 美智代、諏訪茂樹、瀬在 泉、任 和子、蓮井貴子、花家 薫、深井稜博

【広報委員会(常設)】

岡 美智代(委員長)、小林好信(Web管理担当)、白土菜津実(ニュースレター主担当)、
二瓶映美(ニュースレター担当)

【中川記念奨励賞選考委員会(常設委員会)】

河口てる子(委員長)、梓川 一、元村直靖、安酸史子
(以上、理事から選出)

岡本響子、鷹田佳典、林 哲也、藤田裕一
(以上、評議員から選出)

【利益相反委員会(特別)】

安酸史子(委員長)、梓川 一、河口てる子、元村直靖(以上、理事から選出)

【企画運営委員会(特別)】

諏訪茂樹(委員長・教科書担当)、梓川 一、岡 美智代(共同研究企画担当)、上山千恵子、小林好信、酒井幸子、白土菜津実、河口てる子、中川 晶、任 和子、蓮井貴子、花家 薫、樋口倫子、深井穫博、道信良子、村上 真(学術大会デジタル担当、オンライントーク)、元村直靖、安酸史子、吉岡隆之

【国際交流委員会】

道信良子(委員長)、中川晶、吉岡隆之

【総務担当】

小林好信(会員管理、会計、Web管理担当)

酒井幸子(総会、理事会、事務局労務管理、選挙担当主)

支部活動紹介

第115回東京支部研究会のご案内

【タイトル】 行動変容を支援する動機づけ面接(MI)とコーチング 2026

【講師】 瀬在泉(防衛医科大学)、諏訪茂樹(東京女子医科大学)

【日時・場所】 2026年2月23日(祝・月)13:00-17:00 Zoomオンライン会場

【参加費】 学会員 無料、非会員 ¥2,000(税込)

【詳細・お申込み】 [こくち一ずプロ](https://www.kokuchpro.com/event/02fa82e5c3bb534e20b5cef815018323/)より

【ねらい】

<https://www.kokuchpro.com/event/02fa82e5c3bb534e20b5cef815018323/>

無関心期、関心期、準備期、実行期、維持期の5つのステージにより、行動変容の過程は説明されます。各ステージにはそれぞれに固有の課題があり、そのために必要となる支援技術は違ってきます。第111・113回研究会と同様に今回も、行動変容ステージと支援技術の関係を理解したうえで、無関心期や関心期で求められる動機づけ面接(MI)と、準備期や実行期に求められるコーチングとを、ロールプレイの演習を通して学びます。

【内容】

13:00-13:50 導入講義:行動変容ステージと支援技術 諏訪茂樹(東京女子医大)

14:00-15:20 演習1:無関心期・関心期の動機づけ面接(MI) 瀬在泉(防衛医大)

15:30-16:50 演習2:準備期・実行期のコーチング 諏訪茂樹

16:50-17:00 まとめ 質疑応答



会員募集のお知らせ

会員の皆様には、本学会に興味や関心のありそうな方々に、本学会への入会をお勧めいたしますようお願いいたします。なお「日本保健医療行動科学会入会のご案内」は、本学会 Web サイト(<https://www.jahbs.info/>)からダウンロードができます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

編集後記：会長就任のあいさつ、学術大会を終えて、次回学術大会のご案内、本の紹介、総会報告、役員・委員会構成を掲載させていただきました。朝晩は涼しくなってきましたが、日中はまだまだ暑さの残る群馬県です。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。次回大会のテーマは「行動科学の『知』を結ぶ」。理論や具体的な実践を通して、「人を包むまち」についてどのような視点が見えてくるのか、今からとても楽しみです。開催地となる福井市は、北陸新幹線の延伸により、東京からのアクセスがぐっと便利になりました。私自身も、約9年間暮らしていたことがあり、思い出深い「まち」です。駅前には動く恐竜が何体もいて、初めて見ると大人でも少し驚いてしまうほどの迫力。福井らしさを感じるユニークな光景です。当日、皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。福井のお土産、おすすめありますので、気になる方はぜひ聞いてくださいね♪(白土)